

婦人と子とも



幼稚園保育の功果につきて

世の中には、教育の力を過信する人がある、教育さへ受けさせれば、どんなにでも豪い者になれる、どんな、立派な者にもなれると考へるのである。併し、これは間違である、教育は、そんな萬能力のある者でない、どの位、教育を施した所が、天性馬鹿な者を賢くする譯には行かぬ、天性鈍な者を非常に伶俐な者にするとは出来ぬ、學科の方でも、どうしても性來、算術の嫌な者を、立派な數學家にしようも

いふことは、望めない、松の木を梅の木にするといふ様なことは、教育に於ては到底出来ないものである。これは、教育の方では、子供の個人性の上から来る制限といつて、教育を受ける子供には、各自もって生れた特別の傾向があつて、教育では、とても、其以上に力を及ぼす事は出来ぬ、多少は、其性質に影響を及ぼして、非常に軽躁な子供は、少しは軽躁でなくする事は出来るにしても、全く一變して、着實沈重の人物にすることは出来ないのである。夫だからして、どれ程資本をかけて、教育した所が、出来ない者は、矢張、物にならない、これは、どうも仕方がないのである。

然し、以上の理由があるからといって、この子供は出来ないから、教育を施しても駄目だ、一層のこと放任して、なり行に任せて顧みないで置かうといのは、又甚しい間違だ、なる程、前述べた様に、教育には、一定の制限があるけれども、其制限内に於て、教育の力を十分働かせることが出来る、例へば、天性、悪い傾向のある子供は、放つて置けば、だん／＼甚く悪くなつて行くのであるか、教育を施して夫を或程度まで食ひ止めて、悪くなつて行かない様にする事が出来る、若し又善良な、性質のものは、教育によつてますますよくなる様に育てることが出来る、かういふ次第であるから、よくても、悪くても教育を受けさせないといふ譯には行かぬ。西洋のエライ學者が、「人の人たる事を得るは、たゞ教育の力に依る」といふたのは、こゝらのことをいふのであらう。

夫で、一汎普通教育は、子供の發達の順序に應じて、家庭教育、幼稚園保育、小學校教育といふ様な種

類に分れるが、前述べた子供の個人性の上から来る制限は、どの種類の教育に於ても免れることは、出来ぬ、故に、餘程、教育に注意する家庭の子供だからといつて、小學校に行つて、始終優秀とはいはれぬ、反つて、一向、家庭教育などに重きを置かない所の子にエライのが出来る事もある、これも仕方がない。幼稚園保育の成果も、同じことである、いくら、幼稚園の保育を受けたからといつて、鈍な者は矢張り鈍である、餘り出来ない者が非常な豪い者になることの出来ぬことは、決り切つた事である、然るに、教育力の過信者は、特別に幼稚園保育の成果につきて多きを望んで居るかの様に見える。幼稚園の保育を受けた子供は、誰れも彼れも、小學校へ這入つてから、悉く優等の成績を得るべきである、學科の成績の優等たるべきは勿論、品行も、否な、其子供の性質まで悉皆優良であるべきであると言ふのである、これは、甚だ過當の要求である、實際僅か、三年間幼稚園保育を受けたからといつて、こんなになれる理由がない、幼稚園保育だけが、獨り子供の個人性の制限を免れるべき理由のないことは明な次第である。まして、教育といふものは、いろ／＼の力が寄り合つて出来るので、幼稚園へ行つて居るからといつて、其時の教育の力は、幼稚園だけでない、此時分の家庭教育の力が、甚だ大きな働をしてるので、幼稚園は言はゞ、其手傳たるに過ぎないのである、夫に向つて、右の様な望を囑する事の、頗る過當なことは申すまでもない。も一つ考へなければならぬ事は、幼稚園保育の方法である、どれ程、目的がよくつても、方法が至つて居ねば駄目である、幼稚園で子供を保育する方法は今日十分至つて居るかどうかといふことは

問はずとも知れて居る、かゝる方法の下に、以上の望を達しようといふは、そもく又無理である、但し、方法は漸次改良が出来るにした所が、前述の二つの理由は、到底取り除くことは出来ぬ、次に、又幼稚園保育の効果を餘り過小に見る人がある、幼稚園なんて詰らない、何の益にも立つものではない、其證據は、小學校に來てからの成績はどうか、他から來た生徒と餘り優劣がないではないか、否、時とすると、幼稚園から來たのは反つて成績がよくなくて、落第などするではないかといふのである。然し、これも、つまる所は、前に述べた幼稚園に向つての要求の適當なものと、同じ理由で、不當だといふことが出来る、幼稚園から出るものは、悉くエライ者許りでないことは明白である。其中には詰らぬ者があるからといって、幼稚園の保育は、何の益にも立たぬといふのは、間違つた話といはねばならぬ。

要するに、幼稚園保育といふもの、効果を非常に、過當に考へるの、間違つて居ると同時に、之を過小に考へるのも同じく間違つて居る。よくても、悪くても、獨り之を幼稚園の責任と考へることは出来ぬと同時に、一體、教育といふもの、結果は、今といって、今すぐ顯はれるものでない、幼稚園を出て、小學校に行く、行つてすぐ幼稚園の成果の見えることを期望するのは、餘り近愆すぎる、此の様な近い結果を期望する所からして、間々幼稚園の仕方は智育に傾き過ぐるといふ弊に陥るのである。教育の成果といふものは人の一生の永い間に顯はれるを期せんければならぬ。

故郷といふものは、いつくまでも、人の思想を支配するもので、五歳六歳の時、故郷を出て、一生、他郷に流寓する人でも、其幼い時に受けた、故郷の感化は、生涯、其人を去らない、思一度、故郷に至ると、此處の小山、彼處の小川、遙か彼方の鎮守の森や、直き裏の稻荷の宮など、夫から夫へ曆々と胸に浮び出ると思ふと、あの日は友の誰と其處でどんな遊をした、この日は此處で、村のお老翁さんといふ話をして面白かつた事などが亦、かすけくおぼろげに然も確に思ひ出で、は繰り返される。故郷といふことに伴ふこれ等の印象、早く小さい頭に深くも、刻まれたこれ等の印象は、實に、其人一生の思想を支配するもので、其人の善悪の性格は、其大部分は確に、之等の印象から影響せられるといふことは疑ない事實である、然かも、其當初に於ては、之等の影響の結果は、そう著るしく見られないのである。而して其價値は、實に、其見られない所にあると思ふ。幼稚園は、或意味から見、教育上の故郷と見たらば極めて穩當だと思はれる。

(牧

羊)